米軍・フィリピン軍 バリカタン演習

Building relationships through sharing knowledge

April 12, 2016

Original text by Staff Sgt. Michael Smith
374th Airlift Wing Public Affairs

【フィリピン：マクタン・ベニート・エブエン空軍基地発】 ぎこちない沈黙と呆然としたまなざしは、異国の地で何かを教える際にしばし見られる光景だ。しかし4月8日、バリカタン演習で横田基地第36空輸中隊の隊員たちがフィリピン軍第220空輸航空団C-130の隊員たちに空輸の知識を伝えに行った際は違った。

米空軍横田基地第36空輸中隊とフィリピン軍第220空輸航空団のパイロットたち

バリカタン合同演習は、アメリカとフィリピンのパートナーシップ強化のために毎年行われている

バリカタン（タガログ語で「肩を並べる」の意）演習は、フィリピン軍と米軍との合同演習で、フィリピンとアメリカのパートナーシップ、人道支援、災害救助運用力の強化を目的に毎年行われている。夜間飛行を行う一日の訓練課程で、第220空輸航空団の隊員たちは第36空輸中隊の隊員たちを大手かつ、笑顔で歓迎した。

「演習ではフィリピン軍の隊員に暗視ゴーグルとC-130について教え、彼らの高い関心を目の当たりにし、とても充実した。このような任務にとてもやりがいを感じる。彼らがC-130の飛行に興奮し喜んだ姿を見られてよかった。今回、自分は初参加だったが、この演習に参加できたことを幸運に思う」と第36空輸中隊C-130パイロットのスコット・ブルークス中尉は述べた。

一日は、低空夜間飛行、暗視ゴーグルの使い方、米空軍のロードマスターの運用テクニックについての説明で始まり、フィリピンの島々上空をC-130で夜間飛行して終えた。参加したフィリピン軍のパイロットたちの多くは、フライト学校を卒業したばかりで、まだ航空機に割り当てられおらず、今回C-130を飛行するのが初飛行となった。

フィリピン軍第220空輸航空団C-130油圧システム整備士・ロードマスターのジャック・ナバロ一等空兵は、「米軍のロードマスターとパイロットたちから多くを学んだ。彼らの道具はとてもハイテクで、隊員たちは専門分野に精通している。暗視ゴーグルの能力を体感できて良かった。自分たちにもそれらが導入された際、誘導路灯がない多くの飛行場に夜間でも着陸できることを知った」と述べた。

暗視ゴーグルがついたヘルメットを着用するフィリピン軍のラルド・ピンカ少尉(右)

横田基地第36空輸中隊の隊員たちは、暗視ゴーグルを使った夜間飛行の方法をフィリピン軍のパイロットたちに教えた

フィリピン軍のパイロットたちと知り合い、共に働くことで、ブルークス中尉は彼らの将来性を確信した。「将来、フィリピン軍と共に働ける時が来るのを楽しみにしている。新世代のフィリピン軍のパイロットたちは、100％有能で、我々がここで教えることを意欲的に学ぼうとしている。パートナーシップと友好関係を構築するために我々はここに来た。それがまさしくバリカタン演習の目的だ」とブルークス中尉は言った。

飛行訓練終了後、ナバロ一等空兵は第36空輸中隊の米兵たちへ謝辞を述べ、二国間の更なる航空空輸技術の共有が出来る環境が構築されることを期待すると語った。